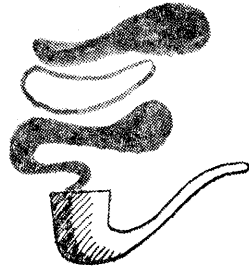


過ぎたるは



日名子 太郎

一 昨年は、お隣りの中国、そして昨年は、去る十一月の下旬に、マレーシア、シンガポール、そしてインドネシアと児童福祉関係調査の為の旅をした。かつて、インド、スリランカなどを歩いて、すでに、いろいろと感じたことではあったが、当時よりもはるかに高度経済成長をした日本を背景にして見ると、一層、感じさせられるところが多かった。

まず、第一は、人口の問題である。中国、インド、インドネシア、シンガポールなどは何れも人口過多に悩んでおり、その人口の多きが故に、容易に近代化も出来ず、ジレンマに悩んでいる状態はまことに深刻である。ところで、つい先

日、わが国の今後の人口推計が発表され、将来、無類の老人国家になるという、全く、前述の国々とは異なった問題を藏しているのがわが国である。そして、出生児数の極端な予測以上の減退は、子どもに関係のあるあらゆる分野に深刻な影響を与えつつあるし、将来を考えた場合、必ずしも好ましいことではないのはいうまでもない。

第二は、わが国の産業・経済界の進出のすさまじさである。走る車も、走っている道路も、その沿道の建物も、あれもこれも皆、日本の会社によるもので、よくもここまでと思うが、その反面、その利潤の一部を、その国に還元してやる

ことを知らない日本人の利己的な考え方には大きな疑問があるし、同時に日本人が自からの生活状態の恵まれていることを認識しようとしめない態度にも疑問が度々うかんだものである。そして、この事は、次の第三の予想以上の発展途上国の貧困さと、貧富の差という問題につながってくる。想像もできない程の低い賃金、高い失職率、それに原因する就学率の低さそして文盲の多さは、驚くほどである。アメリカが、貧困対策、つまり社会改革の一つの手段として、ジョンソン大統領以来、ヘッドスタート計画、フロースルー計画と多額の費用と人材を投入して行なつて来た幼児教育プロジェクトは、その成果の程は兎も角として、その構想の大きさ、多様さ、そして副次的効果の大きいことは眼をみはるばかりであるのだが、それと同じようなプロジェクトが、インドネシアで婦人役割担当相 (Minister of the roll of women) の下で、P・K・Kとよばれる社会運動と結びつけて、始められていることは、注目すべきことである。しかも、それについてのレポートをユニセフの依頼で、前述のヘッドスタート計画に参加したアメリカのニムニヒトがまとめているのも興味深いことである。

さらに、わが国のように単一民族、単一言語を持った島国の集中豪雨的行動型をもつ単細胞人間としかよびようのない日本人の考え方から見た場合、不思議にすら感じられる多民族、多言語、多宗教で国家が成立しているということもきわめて興味のあることであつた。それと同時に、同行したわが国の行政畑の方々が、人間的には皆きわめて立派で、よい人々であるのに、不幸にして行政畑にいる、又はいたが故に、ものごとのとらえ方が、画一的で、一つの日本の尺度でしかできないという不幸な事実も、より以上に私には興味をひく点であつた。私のように小学校以外、国と名のつくところや公立的な学校にも、職場にも団体にも全く関係したことのない、しようとしめない人間には、やりきれないような考え方が日常性になつて了つていることは、一つの恐怖をすら感ぜしめるほどであつた。

そして考えた。わが国は、このままで行くと世界の孤児になり、太平洋の一隅で漂流しなくてはならなくなるのではと……。それもこれも、日本人の集中豪雨的行動型と過ぎたるは何とやらのたとえのような公費依存型思考人間の増加に原因がありそうに思えてならないのである。

(玉川大学)